

◆ 冬 鳥 ◆

例年、10月から11月になると、淀川の河川敷には冬場を平野部や河川の中・下流域で過ごす、いわゆる「冬鳥」がやってきます。南方や大陸から渡ってくるガン・カモ類などの「水鳥」は当然河川をエサ場としても利用していますが、広大な開水面を有する大河川の下流域を越冬場所として利用し、大きな群れで休息をしています。採餌の際には、群れでエサ場の他の水域に大移動をして、その後また戻ってくるということを、冬の間中繰り返します。

一方、大陸から移動して来たり、国内の山間部から里に下りてきて、河川敷の草原や樹林帯で群れではなく分散して縄張りを形成する「陸鳥」も存在します。これらの鳥たちは、休息場としての利用というよりも、冬の間中ずっとその場に留まり生活の場とするために、河川の植生や生息する小動物たちとは密接な係わり合いがあります。

小型の猛禽類とも呼べる『モズ』は、草むらや林の中で昆虫やカエルなどの小動物を捕食します。中型の『ツグミ』は、主に地面で昆虫や草の種子を食べ、『アオジ』や雄・雌で羽の色・模様が顕著に異なる『ジョウビタキ』や『ベニマシコ』は、ノイバラなどの赤い実やイネ科の種子をついばみます。

冬場の河川敷では、『スズメ』や『ヒヨドリ』といった「留鳥」と呼ばれる年中その場に生息する鳥もいるわけで、淀川は、「留鳥」に加えて「冬鳥」の餌・生息をも支える多様な環境条件が整っているということになります。冬の淀川はまさに野鳥天国となります。ぜひ双眼鏡を持って出掛けてみてください。「えっ、身近にこんな鳥が！」という思わぬ出会いに恵まれることに違いありません。



●モズ



●ジョウビタキ（♂）



●ベニマシコ（♂）



●アオジ

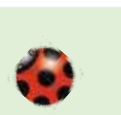
環境省 環境カウンセラー
NPO法人 nature works

池田 哲哉



来た・見た・聞いた

淀川雑記帳



夏が居残っていた10月、空が高く感じる11月、下流域をぶらぶらと歩いてみた。平日だったので利用客は少ないが、ランニングしている人は意外と多い。男女のカップルで走っているのは、定年退職後のご夫婦だろうか。若い女性もカラフルなウェアで、タイムを計りつつジョギング。海老江地区にはラグビー場があるせいか、屈強そうな男性もちらほら。エグザイル並

みの体脂肪なのだろう。対岸の西中島地区は大きなBBQ広場が広がる。ゴミ回収・処分のため有料化されたが、休日ともなるとお祭り会場のようになり人が集まる。犬の散歩、野球を楽しむ人々。さまざまな河川利用で市民に憩いのひとときを提供している。両岸ともゴミはほとんど見かけない。ルールとマナーを守って、みんなの都会のオアシスを維持したいものだ。（編集長・石山郁慧）

淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きもののシグナル

水辺の博物誌



いつも尾を振る水辺の愛嬌者

キセキレイ *Motacilla cinerea*

淀川支流の山間部、溪流で夏場に姿を見かけるキセキレイ。その名のとおり腹部の黄色が目立ち、セグロセキレイやハクセキレイと、明確に見分けられます。冬場には市街地でもまれに見かけられますが、他のセキレイが比較的人が近づいても平然としているのに比べて、キセキレイは警戒心が強く、なかなか近づかせてくれません。いつも尾を上下に動かす愛嬌のある姿から、「石たたき」「庭たたき」とも呼ばれています。（画/森本宏美）